巻頭言

特集「近現代の神道・日本文化」に寄せて

明治聖徳記念学会理事長

正彦

る日本文化、 き、五穀豊穣を祈る祈年祭や収穫感謝の新嘗祭が形骸化していると言えよう。三千年にわたり培ってきた水稲耕作によ 団志向・現世主義)と神道は合致する。しかし戦後、高度経済成長とともに農業人口が減少し、神々崇拝の基本というべ づける制御装置と考えている(拙著『こんなに身近な日本の神々』毎日新聞社)。両者の関係は深く、日本文化の重要な一面 え、「日本文化」とは我が民族集団構成員の暮らし方・考え方・感じ方の総体であり設計図、その機能は構成員を秩序 私は、「神道」とは日本の神々に対する信仰(意識的な信じ方)、 が学校教育より締め出され、代わって規範性の薄い民主主義・自由主義・人権尊重などが強調された。 日本人の生き方・考え方のスタイルが失われつつある。さらに、近代の国民道徳の指標であった「教育勅 あるいは信頼 (無意識的な信じ方) を有する生き方と捉 日本人は富

切である所以はここにある。そして、私たちは絶えず神道や日本の歴史・文化を実証的に研究しつつ、日本改良策を探

人間は集団の中でしか生きられないのであり、集団への奉仕が人間にとって大

国を成し遂げたものの崇物・拝金・利己主義の風潮を助長させ、集団によって生かされているという意識を喪失し、

神的に不安定な社会を現出させている。

求していかなければならない。

のために貢献できるよう願ってやまない。 流 話をすることが困難な状態が続いている。こうしたなか、本特集において多様な立場・ジャンルにおける研究成果の交 うに研究者が実証的研究と規範学的研究の成果を総合しつつ、 神道研究では不幸なことに、占領政策や共産主義などの諸要因によって学者の心情にも著しい乖離が生じ、かつてのよ おける実証的 みると、 年子女の精神教育上に資する」とも述べていることに注意したい。実際に神道研究の先駆的学者の研究や視点を眺 まさに前者の典型であったといえる。しかし同じ趣意書に、「現代思想界の動揺を救治し、国民道徳の涵養上、将た青 明治聖徳記念学会は、神道をはじめ「日本の精神文明」に関する「科学的に精確なる研究」を趣意書に謳っていたから 法による宗教学・歴史学・民俗学・考古学・神話学・日本思想史学などの諸研究があり、後者は日本の神々信仰の言葉化 が実現したことの意義は少なくないであろう。本会の取り組みがこれからも、神道研究はもとより日本文化力の高揚 るいは尊皇愛国への念を共有していたため、規範学的側面 近現代の神道研究を振り返ると、 柳田国男・大場磐雄・津田左右吉・村岡典嗣など)も、 (神道神学)を目標にする規範学的な研究をいう。大正元年に宗教学者の加藤玄智博士が中心となって創設した 「神道の科学的研究」と「神道学」に大きな隔たりはみられなかった。 (歴史学的)研究という大きな枠組みが共有されていたし、他方の科学的研究者(例えば加藤玄智・宮地 「神道の科学的研究」と「神道学」の二つのタイプが見られる。 西欧流の実証的研究方法を採りながら日本の神々への信仰・ (神学・哲学・倫理) にも理解が示されている。 神道・日本文化の研究や現状・将来について建設的に対 例えば神道学者の河野省三には近代に 前者には実証的 だが戦後の

(國學院大學学長)